

たじみん昼話 142

多治見高校の大きなお世話にならない教育哲学

「すごく苦勞してきたけど、「これ」で乗り越えることができた。だから自分と同じように苦しい思いをしている人に、「これ」を教えて助けてい。」

この行動や想いは一見親切に見える。しかしこの人は、教える程度を見誤った親切が、人の成長を妨げて大きなお世話になることに気付いているのだろうか。

AL 研究によれば、考える力の育成に効果的なのは、親切型より不親切型であることがわかっている。そして親切型は本来持っている力を低減させる課題があるという。多治見高校の授業が不親切なのは、この点を熟知しているからだ。

小学生のころ、近所に「大光模型」という人気のプラモデル店があった。人気の秘密は、買ったプラモデルを無料で作り上げてくれることだ。他店で購入したものまで作り上げてくれる親切さだ。しかも完璧に。

だが、ききょうは一度も依頼したことはない。どんなに大変でも自分で作った。それは、プラモデルの面白みが苦勞しても自作することにあるからだ。だから、作ってもらった友人の完璧さを羨ましいと思ったことは一度もなかった。

振り返ってみると、失敗しても自分で工夫したこの経験が、大学時代の研究に生きたのだと思う。試行錯誤しながら自分でやりぬいてきたモノ作りの経験が、教授や学会も驚く奇抜な実験器具や研究方法の創出に繋がったのだと思う。

親切すぎる授業は、他人がやっているクロスワードパズルやプラモデルに対して、答えを教えたり完成させることと同じではないだろうか。別の言い方をすれば、推理小説の結末を教えているようなものだろう。これではなんのために取り組むのか意味不明だ。

本当の学びとは失敗や痛い目などの様々な経験を通して完成するものだ。したがって、親切すぎる授業は、その甘さで惑わしておいて、肝心なところを搾取し本当の学びを阻害する危険性があることを、生徒自身が肝に銘じておく必要があるのだ。

一方、人は教えたがる生き物だ。特に苦勞した人ほどその傾向は強い。忠告、指摘、アドバイス、おせっかい、しつけ等、形は様々だが、それらに共通する

思いは、「転ばぬ先の杖」の先渡しだ。しかしこの痛みや失敗を抑制しようということが、真の理解の機会と挑戦心を奪うことを、教える側も肝に銘じておく必要があるのだ。

多治見高校の教師は、「失敗する勇気」を育成する重要性を理解している。だから教師たちは、転ぶ(失敗する)まで待つという勇気を持っているのだ。教師は生徒を信頼しているからこそ、成長を見守る勇気を持てるのだ。

したがって教師は、生徒が予想通り失敗した時に、「だから言っただろ」とは言わない。「転んだあとの杖」を渡して優しく助けるだけだ。それが本当の教育的な優しさだからだ。そんな手を差し伸べる学びの場所や機会が多く存在するのが多治見高校なのだ。多治見高校が、一見優しい「転ばぬ先の杖を渡す」親切な授業より、「転んだ後の杖を渡す」不親切な授業を選択した真の目的が、ここにあるのだ。

もし、誰かに杖を渡したいと思ったら、「あなたのためだから」にも2つの思いがあることを思い出すことだ。そしてその思いが、「自分が不安だから、見ていられないから」なのか「その人が大切だからか」なのかを冷静に見極めてから、杖を渡すことをききょうはお勧めする。

ちなみに、桔梗が渡す「転んだ後の杖」は、その知識を教えるのではなく、知識を得るために必要な手段という杖だ。桔梗の教育はもう一段不親切なのだ。